

第41回人権啓発 詩・読書感想文 入選作品集

みんなでかんがえよう みんなのじんけん



今回の入選者のみなさん



令和5(2023)年1月29日(日) ピースおおさか(大阪国際平和センター)



大阪府広報担当副知事 もずやん

令和5(2023)年2月発行

主催 大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

目次

第41回人権啓発詩・読書感想文

募集・表彰事業について……………2

詩の部門

小学校（小学部）低学年の部

きみがいる……………	4
ぼくの弟……………	6
心のブレーキ……………	8
ぼくときみ……………	10
素直に謝る……………	12
私の服……………	14

小学校（小学部）高学年の部

あなたのその一言で……………	16
車いすのバリアフリーは少ない……………	18
白と黒……………	20
泣きたい……………	22
夢……………	24
桜の心……………	26
女の子だから……………	28
なんでそうしなあかんの……………	30
人権啓発……………	32
中学校（中学部）の部……………	34
言葉……………	34

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部

みんなでつくったアンナのオーバー……………	36
「はじめてのゆうき」をよんで……………	38

小学校（小学部）高学年の部

「二つの花」を読んで……………	40
「笹森くんのスカート」を読んで……………	42
原爆と人の心……………	44

中学校（中学部）の部

この声が届く幸せ……………	46
戦争によつて起こること……………	48
自ら迎える死……………	50
生きていく私たち……………	52
生きること、死ぬこと……………	54
私の幸せ……………	56
多様性のこの時代で……………	58
「ぼくはイエローでホワイトで、……………	60
「ちょっとブルー」を読んで……………	62
イギリスの13歳に教わったこと……………	64
講評……………	64

寝屋川市立神田小学校	6 年	まつかわ まき 松川 眞希
岸和田市立朝陽小学校	6 年	やまいで れあ 山出 希愛

中学校（中学部）の部

泉南市立信達中学校	1 年	ながい あみか 長井 充実香
-----------	-----	----------------------------------

読書感想文部門

小学校（小学部）低学年の部

阪南市立桃の木台小学校	3 年	うえた こうたろう 植田 孝太郎
泉南市立鳴滝小学校	3 年	くぼ しゆり 久保 朱里

小学校（小学部）高学年の部

阪南市立東鳥取小学校	4 年	なかや れの 中谷 嶺希
泉南市立樽井小学校	6 年	おかもと あやな 岡本 彩那
大阪市立関目東小学校	6 年	きたの はるま 北野 遥真

中学校（中学部）の部

阪南市立飯の峯中学校	2 年	いわさき み お 岩崎 美桜
堺市立津久野中学校	2 年	——
堺市立津久野中学校	2 年	くりばやし あやね 栗林 絢音
交野市立第四中学校	2 年	やくら ゆり の 矢倉 由梨乃
交野市立第二中学校	3 年	あさだ に こ 麻田 和瑚
交野市立第二中学校	3 年	すとう いろは 周藤 彩葉
交野市立第二中学校	3 年	つかの いろは 塚野 栴
交野市立第二中学校	3 年	なかどめ あやな 中留 綾那
阪南市立飯の峯中学校	3 年	ひらい こうじろう 平井 康士朗

○表彰式

令和5年1月29日（日） ピースおおさか（大阪国際平和センター）

第41回人権啓発詩・読書感想文 募集・表彰事業について

一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さやお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内在住・在学の小・中学（部）生から募集しました。

○主催

大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

○募集期間

令和4年7月1日（金）～9月1日（木）

○応募、審査

詩部門・読書感想文部門合わせて1,040作品の応募があり、審査会において30作品を入選としました。

詩部門

小学校（小学部）低学年の部

アサンプション国際小学校	2 年	うえた りゅうすけ 植田 龍介
阪南市立西鳥取小学校	3 年	いけだ りょうま 池田 龍馬
大阪市立関目東小学校	3 年	おおた ゆいと 太田 結翔
大東市立四条小学校	3 年	くぼ た かい 久保田 權
泉南市立東小学校	3 年	すずき かなた 鈴木 彼方
アサンプション国際小学校	3 年	ふじわら さり 藤原 佐理

小学校（小学部）高学年の部

大阪市立関目東小学校	6 年	いのうえ こ あ 井上 琥和
大阪市立関目東小学校	6 年	おおかわ えい 大川 絵衣音
阪南市立桃の木台小学校	6 年	きくもと さら 菊本 紗良
東大阪市立英田南小学校	6 年	とみひさ ち 玉居 智久
大阪府立大阪南視覚支援学校小学部	6 年	はつぎ えにし 初崎 縁
阪南市立下荘小学校	6 年	ひがし ち さ 東 千桜
大阪市立関目東小学校	6 年	ひぐち あ み 樋口 明未

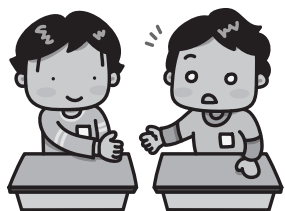
きみがいる

アサンプシヨン国際小学校 二年 植田 龍介

なつやすみに、入ったけれど
ともだちにあえない
コロナであえない

どうしているんだろう
べん強かな？
会えなくてさみしいよ
いっしょにあそびたいよ
ずっと思っている

そうか、
ぼくの心のなかにきみがいる
じゃあ、
きみの心の中に、ぼくはいるのかな
学校がはじまったら言おう
「あいたかったよ」って



ぼくの弟

阪南市立西鳥取小学校 三年 池田 龍馬

ぼくの弟はね

同じクラスの友だちより

ちよつとしゃべるのが

おそいよ

でもね

ぼくにはなに話してるか

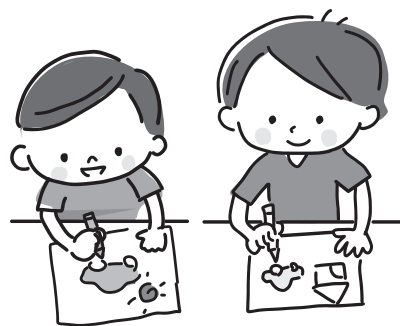
ちゃんとわかるよ

そしてね

ちよつとずつしゃべるのが

上手に なってきたんだよ

みんな からかわないでね



心のブレーキ

大阪市立関目東小学校 三年 太田 結翔

いじわるっていいのかな

みんなに言ったらきずついてしまう

自分が言われていいとしても

友だちは、だめかもしれない。

そしたら、友だちの立場になって

考えてみよう。

そしたら、みんなの気もちが分かって

心のブレーキをかけられるはず。

この気もち

大切にしていきたい。



ぼくときみ

大東市立四条小学校 三年 久保田 權

ぼくときみは顔がちがう

ぼくときみは身長がちがう

ぼくときみは声がちがう

人によってちがうんだなー

ぼくときみは好きなものがちがう

ぼくときみはとくいなことがちがう

ぼくときみは苦手なことがちがう

ぼくときみは気もちがちがう

ぼくときみは考えていることがちがう

ぼくはぼくときみがちがうことが

すてきだと思う



素直に謝る

泉南市立東小学校 三年 鈴木 彼方

けんかした時

怒らせた時

言い間違えた時

僕は素直に謝る

あやまりにくいときは手紙

手紙が書けないなら

やっぱり会って謝る

謝ることから逃げない





私の服

アサンプション国際小学校 三年 藤原 佐理

私は黄色の服を着る

私は青色の服を着る

空色も黄金色も

にじ色の服も着る

着物だって着る

ドレスだって着る

ズボンだってはく

アナタはどんな服を着る？

あなたのその一言で

大阪市立関目東小学校 六年 井上 琥和

あなたのその一言で

誰かが傷つく事がある

あなたのその一言で

誰かが笑顔になる事がある

あなたのその一言で

誰かの考えが変わる事がある

私の一言でも

誰かが傷つく事がある

誰かが笑顔になる事がある

誰かの考えが変わる事がある

一言一言を大切に



車いすのバリアフリーは少ない

大阪市立関目東小学校 六年 大川 絵衣音

車いすに関するバリアフリーは少ない

今日は晴天

ご飯でも食べにいこう

車いすを走らせた

長い道のりだ

やっとなつた

あれ

スロープがない

少しかなしい気持ちになった

こんな世界であってほしい

どこへ行っても

エレベーター

スロープ

様々なバリアフリーであふれる世界

早く

バリアフリーの普及率が

上がりますように



白と黒

阪南市立桃の木台小学校 六年 菊本 紗良

鏡の前でつぶやいた。

「あー。もつとはだが白くならんかなあ。」

お母さんが言った。

「なんで？」

「だって、はだが白いほうがキレイやん。」

「ホンマに？」

私は少し考えた。

たしかに、はだが黒いからキレイじゃないってわけじゃない。

じゃあなんで、私は白いほうがいいと思ってしまったのだろう。





泣きたい

東大阪市立英田南小学校 六年 土居 智久

ぼくは なんとなく笑った

みんなと笑った

心でも笑っていた

ぼくは笑われた

みんなに笑われた

でも ぼくも一緒に笑った

心では悲しくて泣いていた



夢

大阪府立大阪南視覚支援学校 小学部 六年 初崎 縁

朝夢をみた

黒豆ご飯を食べる夢

おいしかった

朝夢をみた

トイレでおしっこをする夢

おしっこしたくなった

朝も昼も夜も夢をみる

ぼくには夢がある

バイクに乗ってみたい

アドレスに乗ってハンドルを持ちたい！

桜の心

阪南市立下荘小学校 六年 東 千桜

私の心の声
弱くて小さい心の声
役に立ちたい
好かれない
いい人だって思われたい
そんな思いに負けてしまう
弱くて小さい心の声

私の心の声
ひっこみ思案な心の声
友だちの意見
先生の評価
家族の期待
だれかの思いで隠れてしまう
ひっこみ思案な心の声

本当はどうしたいの
私の心に問いかける

本当にこのままでいいの
私の心に問いかける

今はまだ
弱くて
小さくて
ひっこみ思案な私の心の声

もっと問いかけよう
もっと耳を傾けよう
もっと大切にしよう

私の心の声
私にしか聞こえない心の声
私にしかひっぱり出せない心の声
私にしか大切にできない心の声
生きていこう
心のままに



女の子だから

大阪市立関目東小学校 六年 樋口 明未

女の子がそんなしゃべり方したらダメ

女の子の部屋が汚かったらダメ

女の子がそんな食べ方したらダメ

こういう風に言われると素直に聞けない

私は女の子だけど可愛いものに興味ない

私は女の子だけど小さい頃仮面ライダーが好きだった

私は女の子だけど生クリームが苦手だ

私は女の子だけど服は何でもいい

言葉遣いが悪いのはダメって分かってる

部屋が汚いのもダメって分かってる

行儀よく食べないとダメって分かってる

でもそれは女の子だからじゃない

人だから





なんでそうしなあかんの

寝屋川市立神田小学校 六年 松川 眞希

なんでそうしなあかんの

なんで、女らしくしなあかんの

なんで、男らしくしなあかんの

なんで、スカート着なあかんの

なんで、ズボン着なあかんの

なんで、あんたが決めるん

人それぞれやからええのに

なんでそうしなあかんの

人権啓発

岸和田市立朝陽小学校 六年 山出 希愛

からかわれたら

誰だってイヤやん

「あの子は大丈夫」って

何いってるん？

「これくらい」って

やられるほうには

「こんなにも」かもしれやんで

たたかれたら

誰だって痛いやん

「だって笑ってる」って

心は泣いてるかもしれんやん。

自分やったらイヤやろう？

もう、やめときよ。



言葉

泉南市立信達中学校 一年 長井 充実香

どんな言葉でも、人によって色々。

どんな言葉をどんなタイミングでかけたらいいかわからない。

言葉やタイミングを間違えると相手が傷ついたりする。

でも、それはね。

相手のことを気遣っている証拠。

「あきらめないで」っていい言葉。

だけど、

人によって受けとめは色々。

「あきらめないで」って言われたとき

嬉しいって思ったり

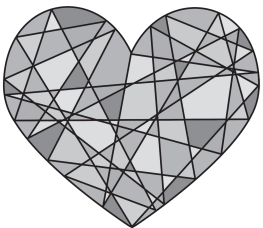
嬉しくないって思ったり。

でも、それはね。

自分の気持ちがあるという証拠。

私たちは、

一生けん命この世に生きている。



小学校（小学部）低学年の部

みんなでつくったアンナのオーバー

阪南市立桃の木台小学校 三年 植田 孝太郎

夏休み、はん南市立図書館へ行った。

入口に赤いひょうしの古そうな本があった。

お母さんが「これかあさんが小学校のときによんだわ。」
 と言った。ぼくは、母さんといっしょに読もうと思いいかり
 てきた。

表紙には、女の子がいて赤いコートをきている。ぼくは
 この女の子がしあわせそうに見えた。きつとアンナという
 名前だと思った。表紙をひらくとお母さんと女の子がま
 どのところにたっている。女の子はうれしそうだけど、お
 母さんは、なんだかなしそうだ。

このおはなしはだいいじ世界大せん後のものないじ
 だいに女の子がいろんな人にたすけてもらって新しいオー
 バーを手に入れるという本当にあつたお話だそうだ。
 「せんそうがおわったら新しいオーバーをかつてあげよう
 ね。」

アンナはお母さんにやくそくしてもらった。

まずおひやくしようさんのところへいき羊の毛とおじい
 さんの金時けいをとりにかえてもらった。でも冬からはる
 になるまでまつように言われた。春になって羊毛が手に
 入ったけれどまだオーバーはできない。つぎは糸つむぎの
 おばあさんにランプとひきかえに、つむいでくれるように
 たのんだ。でも、夏までまつてようやく手に入れた。でも
 オーバーはできない。夏の間に、お母さんとアンナはコケモ
 毛をつんでけいとを赤いろにそめた。アンナが「赤いオー
 バーがいい」といったから。とてもあざやかでこい赤いろ。二
 人ははたやさんにぬのじをおつてもらった。まだオーバー
 はできない。つぎはしたてやさん。したてやさんは一しゅう
 間はたらきづめにはたらいてすてきなオーバーをかんせい
 させてくれた。春に羊毛をもらったのにできあがつたの
 は、冬だった。アンナはせんそう中きつとがまんばかりし
 ていたから、すてきなオーバーをつくつてほしくて長い間
 まてたと思う。せんそう中はみんなつらくて、くるしい思
 いをしたから、アンナがおれいに、きょう力してくれたみ
 んなをしようたいしたクリスマスパーティーはみんなしあ

わせそうだった。

いまロシアとウクライナがせんそうしていて、ニュースを
 見るたびに心がいたい。はやくみんながふだん通りの生
 活ができるようになってほしい。ぼくはせんそうがなく
 なつてほしい。赤いオーバーを着てにっこりわらっている、ア
 ンナのように世界中の人がえがおになつてほしい。アンナ
 のお母さんのようなかなしい顔をする人が世界中から、
 いなくなつてほしい。ぼくは、どの国も話し合いをしてアン
 ナがオーバーをつくつてもらったようにきょう力して平和
 な世界をつくつてほしい。

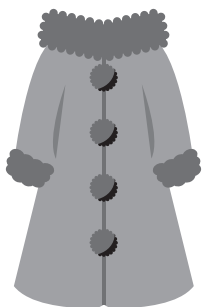
「アンナの赤いオーバー」

著 H・ジューフェルト

絵 アニタ・ローベル

訳 松川 真弓

評論社



「はじめてのゆうき」をよんで

泉南市立鳴滝小学校 三年 久保 朱里

わたしは、「はじめてのゆうき」というお話を読みました。なんでこの本をえらんだかというと、わたしと同じ学校の話だからです。

いちばん心にとったことは、としおは、いつも何か言われてもまったくいいかせないのにすごくゆうきをだして大きな声でいいかせたことです。わたしが、同じようにクラスの人たちからなまはずれや、悪口を言われたら同じように大きい声でいいかせるかなあ?と思いました。

それで、みんなあやまってくれたり、いつしよにあそぶようになって、よかったなあと思いました。

それとお父さんが、休みじかん何をしてあそんでるかきいたときに、しんぱいしないように、うそをついて、サッカーしていると言ったのがやさしいとおもいました。でも先生にもっと早く言ったら、もうすこし早くかいけつでき

たんじゃないかなとも思いました。でも、いじめは、ぜったいだめなので、もしわたしのクラスでいじめられている友だちがいたら同じようにいじめたりしないで先生に言いにつたり話かけたりしようと思います。でも、くくばんに悪口を書かれたり、クラスのみんなからニヤニヤしてジロジロ見られたり、して、ほんとうは学校に行きたくなくて休みたいはずなのに毎日休まずにちゃんと学校に来てるのはすごいことだと思いました。

としおくんはいじめられている理由が全ぜんわからないうのになんでみんなは教えてあげないんだろう。1人でも教えてくれたらとしおくんも自分のわるいところをちゃんと直すのについて思います。

クラスには何十人も人がいるのにだれも手助けをしてあげないのはとてもひどいことです。ニュースとかでいじめがげんいんで学校に行けなくなったり死んでしまったりする人がいることを知りました。ひとりひとりどうすればみんななかよくできるかいじめがなくなるかをしんけんに考えなければいけないと思います。

わたしはこの本を読んでいじめがない世界になればいいなと思ったし、わたししんもしんけんに考えます。わたしがもしいじめられることがあったら助けてほしいし、いじめられてる人がいたら助けたいと思います。それは大人になってもかわらないようにしていきます。この本を読んでよかったです。

「はじめてのゆうき」

著 相馬 公平

小峰書店



「一つの花」を読んで

阪南市立東鳥取小学校 四年 中谷 嶺希

戦争という言葉は、一年生のころから知っていたけど、昔の話で自分には全然関係がないと思っていました。

でも、今年に入って、ロシアとウクライナの戦争のニュースを毎日のように見えて、今でも戦争はあるんだなと思ひ、戦争という言葉が身近に感じるようになりました。

そして、ロシアとウクライナの戦争がはげしくなつたら、国語の時間に「一つの花」を学習しました。

「一つだけちようだい。」と言うゆみ子に、お母さんは、自分の分から二つ分けてあげました。食べ物がないで配給される少しの食べ物しかないのに、お母さんもおなかがいっているはずなのに、ゆみ子に食べさせてあげてお母さんはすごくやさしいなあと思いました。

わたしのひいおばあちゃんは八十七才で、戦争をけいけんしています。この夏休みに、戦争中のころの話を教えてもらいました。

戦争のころは、子どもだったひいおばあちゃん。いつ空から

ばくだんが落とされるかわからないので、一日中こわい思ひをしていたそうです。空しゅうけいほうが鳴ると、みんな急いで近くのぼう空ごうにげたと言っていました。食べ物

は、あまりなくていものつるとかを食べたそうです。もちろんいつもおなか

がペコペコだったと聞いて、戦争中はみんな苦しい生活をしてたんだなと思いました。そして、阪南市でも本

当に戦争があつたと思うと、こわくなりました。ゆみ子のお父さんが戦争に行く日、お母さんが作つた大切なおにぎりをゆみ子が全部食べてしまいました。それでも、まだ

「一つだけちようだい。」

と言つて泣くゆみ子に、お父さんは、プラットホームのはしっぽにさいていた二輪のコスモスをあげました。この二輪のコスモスの花に、ゆみ子が大きくなつて幸せになつてほしいという願ひがこめられているように思ひました。わたしは、この場面がいちばん心に残りました。

十年後、ゆみ子の家の庭にコスモスの花がいっぱいさいて

いるのを読んで、わたしは、すごくうれしい気持ちになりました。ゆみ子は、やさしい女の子に成長して、食べ物も一つだけではなくて、選べるようになり、平和がもどつてよかつたと思いました。

でも、お父さんは戦争でなくなりました。

なぜ戦争をするのだらう。ウクライナもそうだけど、戦争はたくさん命をうばいます。家も家族も失つて、こわくて悲しくてつらいことしか残らないのに…。

わたしは、この本を読んで、平和が人を楽しく幸せにすると思ひました。

わたしは、平和のために大きなことはできないけど、まづは、いつもやさしい気持ちを持つてまわりの人に関わつていききたいと思ひます。

「一つの花」

著 今西 祐行
「国語4年上」光村図書出版所収



「笹森くんのスカート」を読んで

泉南市立樽井小学校 六年 岡本 彩那

二学期からいきなりスカートを穿いてきた笹森くんは、自分の性に悩んでいる真緒のことを理解するためにスカートを穿きました。いきなりスカートを穿いてきた笹森くんと、笹森くんを気にする友達たちのお話です。

私は、自分の性になやんでいる友達をどう理解し、寄りそば良いのかを考えました。

この物語では、いきなりスカートを穿いてきた笹森くんを気にして、笹森くんと仲が良い友達に「仲が良い君が話を聞くべき。」という意見がありました。私はこの意見に反対です。なぜなら、仲が良いからといって理解をしない、しようともしないのはおかしいからです。仲が良い人だけに理解してもらっても、不安は残るはずです。小さな居場所より、大きな居場所の方が心から安心できます。そもそも、「理解する」とは何なのか、どうしたら良いのかを疑問に思いました。でも、この本を読み、ヒントがたくさんありました。いつも通りに、変わらない雰囲気

気で「なにかあったら言つてね。」と声をかけたり、自分の立場だったらどうか、自分と重ねてみるとどうかなどを考えた「認め合う」「安心させる」ということが大事ということに気づけました。

スカートを穿く前に笹森くんが真緒という大事な友達との相談につてほしいと言われました。その内容は「制服がイヤで学校がしんどい。」というものでした。笹森くんは、「男だからスカートを穿く理由はない」という意見を口にする、「私だつてない!」と真緒は声を荒げました。それから真緒は不登校になり、理解するために笹森くんはスカートを穿きました。

わたしは、笹森くんの行動におどろき、感心しました。笹森くんは、自分が変に思われるとか、自分より真緒を優先していて、とてもかっこよく思いやりのある人だだと思います。私も自分の性で悩んでいる人がいたら、話を聞いたり、はげましてあげたりはもちろんするけど、自分がちがう格好にならないでしょう。でも、じっくり考えてみました。そして今は、自分がちがう格好をすること

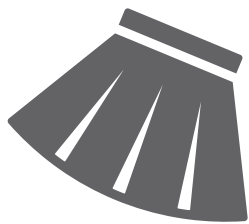
に抵抗はありません。なぜなら、何もはずかしくないし、女子はスカート、男子はズボンを穿く理由なんてないからです。

わたしは、「笹森くんのスカート」を読んで、自分の性に悩んでいる人をどう理解して寄りそうかは、仲が良い人だけなどの決まりはなく、ただ相手が安心できるような言葉や行動が大切だと気づきました。これから私は「ふつう」とらわれず、自分一人一人の個性を大切にできる、そんなきれいな社会をつくっていききたいです。

「笹森くんのスカート」

著 神戸 遥真

講談社



原爆と人の心

大阪市立関目東小学校 六年 北野 遥真

この「ゲンバクとよばれた少年」という本を読み終えて、心が痛んだり、複雑な気持ちになりました。

この本を書いた中村由一さんは、二さいの時に長崎で被爆しました。原爆で兄弟を亡くして、自分も爆風で飛ばされて、その影響で、しゃべることも、歩くことも、記憶も無くなっていました。家も失って引越した先の小学校で先生と同級生にいやなあだ名をつけられて、ずっといじめられていました。被爆で髪の毛が抜け落ちた時は「ハゲ」、少し生えてきたら「カッパ」、最後には被爆したという理由で「ゲンバク」と先生が名づけていたことにぼくはびつくりして、怒りがこみ上げてきました。ふつうなら助けてくれるはずの先生が助けてくれないのは、どれだけ苦しかっただろう、原爆は人を殺すだけではなく、人の心も悪くしてしまうんだと思いました。つらいこともお母さんに言わず、一日中働くお母さんを楽させようと、四年生の時から夜遅くまで働いていました。今の時代では考えられないことです。ぼくたちは、学校に行つて勉強して、給食を食べて、習い事をしたり、友達と遊んだ

りすることが当たり前だと思っていたけれど、戦時中の小学生は生きるのに必死だったんだな、と知りました。卒業式の後、卒業証書を同級生にうばわれて破られそうだった時、今まで何を言われてもされても言い返さなかったのに、「これはお母さんの卒業証書だ」と必死に奪い返したのは、学校に通わせてくれたお母さんへの感謝の気持ちがあふれたからだと思いました。

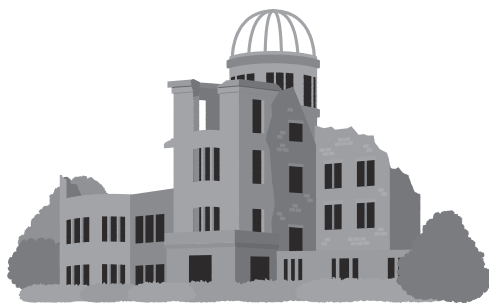
由一さんは「被爆者」という差別の上に、「被差別部落」出身という差別も受けて希望する仕事に就くことができませんでした。ぼくは、被差別部落という言葉を初めて知りました。ぼくも由一さんと同じで不思議に思いました。肉もみんな食べるのに、革靴もみんなはくのに、なぜそれをつくる職人は差別されるのか、まわりの人と何がちがうのか、生まれた場所ですら身分が決まるのか、ぼくには理解できませんでした。

由一さんもこの二つの差別をずっとかくしていたけれど、近所に住んでいたおじさんがみんなに出生を語ったことをきっかけに、勇気を出して打ち明けてその後、子供たちに体験を語っています。つらい体験をたくさんされたけれど、前向きに生きていてとてもすごいな、と思いました。

た。ぼくも、人を傷つけたりいやな気持ちにさせることがないように、仲の良い友達同士でも気をつけようと思います。みんながその気持ちを持てば、いじめや差別はきつとなくすることができます。

ぼくは、原爆が落とされた長崎も広島も行ったことがあるけれど、その時は戦争も原爆も分かっていませんでした。今は戦争や平和についてもっと勉強して、もう一度長崎に行つてみたいです。

「ゲンバクとよばれた少年」

著 中村 由一／渡辺 考
講談社

この声が届く幸せ

阪南市立飯の峯中学校 二年 岩崎 美桜

不安や恐怖を抱えた心の痛みをどこにもぶつけることができない子供たち。この世には周りが気づいていないだけで大勢いるのだろう。そう考えさせてくれたのは、五十二ヘルツの声で鳴くクジラたちだった。

この本に出会う前までは、テレビで観るニュースで虐待に関する事件が取り上げられていたことに対し、「なぜそんなことができるのだろう」という気持ちにしかたがなかった。受けた子の身になると、考えるだけでも胸が痛むし、見る度自分が今生きている幸せに気づかされる。

ここで出会ったのが主人公の貴瑚だ。貴瑚は幼い頃に、両親からとても可愛がられていた弟とは真逆にひどい虐待を受けていた。私は虐待を受けている貴瑚の鮮明な描写が忘れられない。冬でも火の気のない冷えきった空間で、温かそうな肉や魚の匂い、楽しそうな家族の笑い声を遠くに感じながら過ごすのはどんなに苦しかったのだ

ろう。貴瑚は今までどれだけ辛い目に遭ってきたのだろう。そう感じた途端に彼女の様子を表した悲惨さが二文字二文字から伝わってきた。

ある日、大人になって二人暮らしを始めた貴瑚は自分と同じように虐待に遭っている十三歳の少年と出会い、一緒に暮らし始める。貴瑚には過去の経験があったからなのか、ひとりになりたくないという少年を親から保護しようと受け入れていた。しかし、自分だったら、と考えてみる。近くに助けを求めている人がいたとしても、自分が巻き込まれてしまうのではないか、反って自分が悪影響を及ぼしてしまうのではないかと躊躇して結局見て見ぬふりをして逃れようとするのではないのだろうか。実際、少年の祖父も少年のことに気づいていたらうに、助けてあげられなかった。対して、少年が誰にも声をあげられなかったのにいち早く気づいたのが貴瑚だった。

世界で一番孤独だと言われている五十二ヘルツのクジラ。あまりにも高音だから他のクジラたちにはこの声は聞こえない。広大な海で確かに響いているのに受け止め

る仲間はどこにもいない。つまり、誰にも助けを求められない子供たちは、誰にも声が届かない五十二ヘルツの声をあげていた。貴瑚が少年に気づいてあげたのは貴瑚自身も五十二ヘルツの声をあげていたからだと思う。私はこのような貴瑚の行動力にとても心を揺さぶられた。自分の経験から人を救おうとする心から、結果的に少年を助けることができていると思うと貴瑚の行動は本当に偉大だったのだと感じる。そのようなことから、私は貴瑚から人のことを思っただけに動くことの大切さを学んだ。

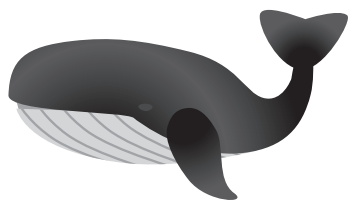
この本を読むと、虐待に関するニュースを見る目が変わると思う。本を通じて、子供たちには自分には気がつくことのできないような助けを求める声をあげていることを知ったし、そんな状況を初めてきいて自分たちが少しでも五十二ヘルツの声をあげる子供たちに手を差しのべてあげられるような存在になれば救われる命はもっと増えるのではないかと思う。だから、私は他人事だと思わずに人の気持ちを温かく迎え入れられるような心を持ちたい。

だから私はそのような、子供たちに理解のある、貴瑚のような大人になりたい。自分には自分のためには行動できたとしても、自分とは全く関係のなかった人までに、

自分と同じ扱いができる自信がないからだ。私は貴瑚に出会って、様々なことを学んだ。虐待のある悲惨さ、人のためへの行動力、今生きていることの幸せさ、そして何よりも五十二ヘルツの声をあげるクジラの存在。自分たちの声をきいてもらえない子供たちの心の痛さを分かった上で、今この声がたくさんの人の元へ届くことの幸せを噛み締めたいと改めて感じさせてくれた。

「52ヘルツのクジラたち」

著 町田 そのこ
中央公論新社



戦争によって起る事。

堺市立津久野中学校 二年

私は、逢坂冬馬さんのデビュー作「同志少女よ、敵を撃て」という本を読みました。きっかけは、ニュース等で戦争の話を見て、戦争ではどんな事が起こるのか関心を持ったからです。

この本は、独ソ戦時のソ連側の女性狙撃兵に焦点をあてた本です。主人公は、18歳の女性狙撃兵・セラフィマです。セラフィマは、ナチスドイツ兵に故郷の村を壊滅させられ、一人生き残ったことで復讐のために狙撃兵になります。そして、セラフィマは学校の同期たちとともに戦争に立ち向かい、何のために自分は戦っているのかを考えていく話です。

私はこの本を読んで、戦争の恐ろしさや悲しみを知りました。戦争が起きると、セラフィマのように家族や友人をうしなう人がたくさん出てきてしまい、にくだり悲しむ人が増えることが分かりました。また、作中ではナチスドイツ兵の攻撃により、セラフィマの同期が傷を負ったりするシーンがありますがその時の状況がとてもリアルに描かれていた事から、まるで自分が同じ戦場にいる

ような恐ろしさを感じました。

セラフィマは戦場の中で、自分自身は何故戦っているのか。何のために狙撃兵をしているのか。という事を見つめなおします。初めは、家族や友人と平和に過ごしていた日々を奪われ、故郷の村を壊滅させたナチスドイツ兵と、セラフィマの母の遺体を焼いたセラフィマのかよっている学校の教官・イリーナへの復讐のために自分は狙撃兵をしていると思っていました。しかし、本当はセラフィマ自身は、ナチスドイツやソ連等関係無しに苦しんだり、悲しんだりしている女性を救いたいという思いが分かりました。このことから、セラフィマは女性を救おうとする心の広い、優しい人柄だということが読み取れました。私自身も、ずっと感情にまかせて行動し続けるのではなく、時には自分自身を見つめなおす必要性があると思います。

この本の中で出てくる人種差別や男女格差などの問題は、本の中だけでなく現実でも、世界的に多発していて、実際に私もニュースや新聞などでよく見かけます。私は、ニュースなどでこの問題を見ているだけの傍観者であるのではなく、日頃から差別をしないなど、自分自身が

出来る事を率先してやっていきたいなと思いました。また、私はセラフィマのような人と思うことができ、そして正しい行動が出来る人になりたいとも思いました。

私は、この本を読んで、登場人物の行動や心情から学べる事がたくさんありました。また、自分自身も見つめなおしたり、考えをあらためるきっかけをもらえたので、この本を読んで良かったなと思いました。

この本の中からは、戦争の事だけでなく、人種差別や男女格差などの問題についても知ることが出来ます。今、世界では多くの戦争や紛争が起きているので、この「同志少女よ、敵を撃て」などの戦争に関する本を読むでもらったりすることで、戦争や問題になつていくことについて、より多くの人に知ってもらい必要性があると思います。

「同志少女よ、敵を撃て」

著 逢坂 冬馬

早川書房



自ら迎える死

堺市立津久野中学校 二年 栗林 絢音

みなさんは自ら死を選択することについてどう思いますか。この本は、安楽死が合法化された世界と安楽死を望む方たちと向き合うアシスタである遠野真白の今の時代とはまったく異なる世界を描いたお話です。自殺はいけないこと。ダメなこと。という固定概念を壊してくれる。そんなお話です。

『死にたい』ではなく、『生きていたくない』私がこの本を読んで一番心を打たれたセリフです。今、私たちが生きている社会は、コロナウィルスで制限のかかった暮らし、ネットにあげられている動画のコメント欄を見ると人の心を抉るようなアンチコメントの数々、いじめや人間関係などが原因で自殺をする人などたいへん生きにくい世界になっています。そして「死」というものが、とても近い存在になっているのです。

最近ネットアプリで「9月1日」という文章をよく見かけます。調べてみるとそれは子供の自殺が一番多い日でした。夏休み明けの始業式の日。それが嫌で毎年二〇〇人以上の子どもが「死」を選択するそうです。そしてその文章の動画のコメント欄には

「二人で死ぬのは嫌やから誰か一緒に死にませんか?」や、

「みんなこの日死ぬん?おもしろそうやから俺も便乗してみよ。」

などその他にも自分が死にたい理由をかくコメントがたくさんありました。ネットなのでどこまでが本気なのか分かりませんが、

「生きてても楽しいこともやりたいこともないから死ぬ。」

というコメントを見て私もそう思っていました。本を読んだから違うふうに見えることもできるようになりました。それは、視点を変えてみる。ということ。楽しいことがないから死ぬ」ではなく、「楽しいことがないからこそ探すために生きる」という風に考えると少しだけ気持ち軽くなります。たしかに生きることは辛いし、死ぬことよりも勇気のいることなのかもしれません。でも「死にたい」ではなく、「生きていたくない」のなら考え方や環境を変えることで少しずつ、前が明るくなっていくかもしれません。

私はこの本を読んで、もし自分が安楽死を選ぶなら最後にお話しをするアシスタは真白さんのような方がいいな。と思いました。私は「死にたい。」という相談に「生

きて。」と言うのはあまり良くないと感じます。それはその人に向き合っているようにみえて、さらに追い詰めるように思えてしまうからです。私は、真白さんを見て、人に向き合うとはまずはその人を受け入れることが大事なんだな。と感じました。その人の悩みやかかえているものをまずは正面から受けとめ、自分がどう感じたかをそのまま伝えるのではなく、その人が今後どうしていききたいかを聞き、「一緒に」考えていくことなんだな。と思いました。

私も真白さんのように、色々な人の悩みに真剣に考え、よりそえる人になりたいです。

「レゾンデートルの祈り」

著 樫 一志
K A D O K A W A

生きていく私たち

交野市立第四中学校 二年 矢倉 由梨乃

「人権とは何ですか。」と聞かれても「人の権利」としか思えなかった。でもそんな私が今では、はつきりと答えられる自信がある。世の中の見え方が少し変わった気がする。人としての力がついた気がする。「生きるほくら」を読んで。

この本を通して伝えたいことは、みんな「生きようとする力」があつて、前向きに自ら努力すれば「人生」は変わるということ。まだ十五年も生きていない私が、人生の経験も全然な私が簡単に言えることではない。説得力なんてないかもしれない。だけど、これから私の人生の教訓にしようと思つたし、皆さんに届いて欲しいと思う。私たちはあたり前のように生きている。だが、生きていく中で「死んでしまいたい」と思うことや、「こんな自分なんか消えてなくなればいいのに」など、二方向的に自分を追いつめてしまうことがある。でもそんな時ずっとネガティブに思つていても何も起らないし、何も変えられない。この本の主人公の麻生人生もそうだった。学生の頃に陰湿極まりないじめを受けて、引きこもりになつてしまう。い

じめを受けた時は全身アザや傷だらけで「もう死んでしまいたい」と強く思っていた。誰でもいじめを受けたら学校になんか行きたくなくなる。だけどとても心が熱くなった。なぜならば、いじめを受けても学校に行つて、親に迷惑をかけないようにたえていたからだ。誰にも言えずに痛くて苦しかったと思う。それと同時に、やられた本人やその親、身近な人など、誰かを傷つけて「生心に傷が残るようなことは絶対にしてはいけな」と心に誓つた。いじめは、相手が嫌だと思つたらもういじめなのだということを昔に先生から聞いたことがある。でも、じゃああつて叩いたりするのもいじめなのか。私はそれが未だに分からない。それは自分たちで判断しなさいということなのかと考えた。これは生きていく中でちゃんと区別できるようになりたいと思う。

この物語の中で印象に残つたシーン。だが、それはとても長い。何かというと、人生の心境がどんどんポジティブになつて性格が明るくなること。母に捨てられ、祖母の家に行き、認知症の祖母や沢山のひとと生活し、米づくりを通して成長していく。私は読み終わった時、人生が引き

こもりをしていたのを忘れていた。それぐらい、ポジティブになつたんだと思つて、誰でも「頑張ろう」「協力しよう」「楽しもう」など何でも強い意思があれば、どこまでもパワーアップできる。だから「可能性は無限大」なんだと思つた。

お米一粒、昆虫：そして人間。これらはみんな生きている。だから意見が噛み合わないことだつて、けんかすることだつてある。でもそれはみんな個人個人が正しいと思うことを尊重しているから。「みんなちがつてみんないい。」私知っている名言みたいな言葉が、本に書き表されていなくても感じ取ることができた。これから人生を俯瞰して見て、何事も前向きに考えていきたい。そして、周りの人を楽しませたりして幸せにする。これもうごく大事な心がけの一つだと思つた。皆さんはどうだろうか。自分をもう一度見つめ直して充実した「人生」を送ってきたい。

「人権とは何ですか。」それは「生きようとする力。生きようとする心。」

「生きるほくら」

著 原田 マハ
徳間書店

生きること、死ぬこと

交野市立第二中学校 三年 麻田 和瑚

私は『余命99日の僕が、死の見える君と出会った話』という本を読み、この世界の見え方が変わった。私はこれまでに様々な「生きる意味」についての小説を読んできた。それには理由がある。

私は小学六年生から中学二年生の間に何度も小さないじめを受けてきた。もちろん死んでしまいたいと投げやりな気持ちになった事だつてある。私はこの悩みをたった数人の友人とお母さんにしか打ち明けることしか出来なかった。そんな時に私の心を救ってくれたのがこの一冊の本だった。私はこの本のおかげで生きる意味を見つけ出し後悔の無い人生を歩もうと思えたのだ。

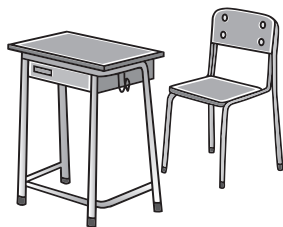
「死」というのはたった二文字で表されるものだが、その二文字の中には怒り・後悔・苦しみ・孤独など様々な意味が含まれているのではないかと私は考える。この本は寿命が見える男の子、その親友、そして周りから嫌われている女の子の三人の物語だ。私は初めにこの本を読んだ時「命の期限が見えるのであれば助けるのは当たり前だろう。」と考えていたのだが、読み進めてみるとただ助け

るだけの事でも本当に勇気のいることだと思った。この主人公の頭の上に寿命の期限が見えるようになってしまった時、私はこの事を自分に置き換えて想像してみた。実際に起こったら私は失神してしまうかもしれない、死ぬまで生きた心地がしないだろうと思った。だがこの本の主人公は頭にある数字を鏡で見ても「自分の運命には逆らわない。」と言う。私だったらそんな事絶対にしないのにと心で強く思っていた。どうして自分の命を簡単に捨てようと思えるのか、なぜ自分を救い出せる方法を考え出さないのか、私は深い疑問に襲われた。

その時私は気づいた。この主人公のように命をそう簡単に捨ててはいけないのだと。私にはたくさんの友達、先生、私のことを一番に思ってくれている家族だっているのだ。この世界でたった一つしかない生命を大切にしなければならぬとこの小説が気づかせてくれたのだ。この世の中には見えてない所でたくさんのいじめや虐待、犯罪が起こっている。それを全て解決させるのは正直難しいのかもしれない。だけどこの広い世界の中で少しでも生きたいと思ってくれる人が増えていけばいいなと私は思う。

昔の自分のように「生きる意味とは何か」探している人は今現在も居るだろう。だが、もし自分の頭上に死のカウントダウンが急に現れたら人間誰もが焦るだろう。本当に死にたいと思つて生きる事なんてどうでも良いと思つていた人でも実際に数字に現れたら皆焦るだろう。この本を読み、私が気づかされたことは死のカウントダウンが見えるからどうという訳ではなく、見えても見なくても毎日精いっぱい生きることが一番なのだ。そしてこの人生が終わつてしまう時に楽しかったと思えるような人生を歩んでいきたいということ。

「余命99日の僕が、死の見える君と出会った話」

著 森田 碧
ポプラ社

私の幸せ

交野市立第二中学校 三年 周藤 彩葉

「幸せとは何か。」友達と何気ない会話で盛り上がった時。好きなアニメを見る時。甘いスイーツを食べた時。この本を読む前までは、そんな自分にとって楽しいことだけが幸せだと思い込んでいた。しかし、この本を読んで、それだけが幸せなのではないことに気づいた。

小学生の小柳奈ノ花は、国語の授業で自分の幸せについて発表することに。なかなか答えが見つからない奈ノ花は、高校生の南さん、季節を売る仕事をしているアバズレさん、お菓子作りが上手なおばあちゃんといった三人の女性と出会い、幸せについて考えていく。

私は、この四人の登場人物の行動や言葉から、人生のヒントをもらうことが出来た。

奈ノ花からは、「自分に自信を持つ」ということを教えてもらった。奈ノ花は、思ったことを、躊躇なく言うことが出来る。素直で、自分に自信があるのだと思う。逆に私は、人に流されやすく、思ったことを言えないことが多い。自分の考えを否定されるのが怖くて、思ってもいないことについてしまう。だから私は、奈ノ花のよう

に、自信を持つて自分の考えを伝えられるようになりたいと思った。その思いは、読み進めるうちに強くなった。奈ノ花は、学校に来なくなってしまうクラスメイトの桐生くんのため、家に行つて自分は味方だと伝える。最初はなかなか心を開かない桐生くんだったが、徐々に心を開いていき、「一緒に、学校に行こう」と誘うくらいまで奈ノ花に打ち解けるようになった。この場面で、私は、自分が思っていることを自信を持つて伝えようと、相手に自信を与えることが出来るのだと思った。だから私も、人に自信を与えられるよう、今の自分を変えて、自信を持てるようになろうと思った。

南さんからは、「未来を変えられるのは今の自分」ということを教えてもらった。南さんの言葉の中で、「いいか、人生とは、自分で書いた物語だ」「推敲と添削、自分次第で、ハッピーエンドに書きかえられる。」という言葉が心に残った。私には、テストで前回の点数に満足して、次のテストも大丈夫だと思い込んで勉強をおろそかにしてしまい、点数が下がって後悔した経験がある。だから、南さんの言葉にとっても共感した。過去の点数は変わらないけれど、自分の努力次第でこれからの点数は変えられる

と思ったからだ。未来の自分が満足できる物語に書きかえるため、今の自分出来ることから始めたいと思った。

アバズレさんからは、「相手のことを考えることの大切さ」を教えてもらった。アバズレさんの言葉の中では、「誰も魔法みたいに人の心を分かるなんて出来ないわけだ。だから、人には考えるっていう力がある。」という言葉が心に残った。相手の気持ちが分からない時、人は考えることが出来る。相手の立場に立つて、互いに気持ちを理解し合えば、友好的な関係を築くことが出来るだろう。しかし、人は無意識のうちに、自分のことだけを考えて行動してしまうことがある。それは、世界全体としても言えることだと思う。今でも、戦争や紛争が続いている地域がある。このような地域で戦争や紛争が絶えないのは、互いが相手の立場に立ち、気持ちを理解しようとしていないからだと思う。私たちがこの世界で平和に、幸せに過ごしていくためには、相手のことを考えることが大切だと思った。

おばあちゃんからは、「自分の人生は自分で選ぶ」ということを教えてもらった。おばあちゃんの言葉の中では、「いいかい、人生とは。全て、希望に輝く今のあなたのものよ。」という言葉が心に残った。私の人生は、誰のものとも違う。誰のものとも違う私の人生は、私自身で選ぶこ

とが出来るのだ。今日も、誰とも違ったこの日常を、幸せを、人生を、自分で選んでいきたい。

この本を読んで、今、この瞬間も歩んでいる人生について深く考えることが出来た。この本に出会うまでは、人生で楽しいことだけが幸せなのだと思い込んでいた。しかし、それだけが幸せではない。この本に出会い、幸せについてよく考えてみて、日常の中に隠れていた本当の幸せを見つけることが出来た。毎日、おいしいご飯を食べる、学校に行つて授業を受ける、ふかふかの布団の中で気持ち良く寝るという日常を送ることが出来ている。つまり、楽しいことはもちろん、それ以前に、この日常を送ることが出来ているということこそが、本当の幸せなのではないかと、この本が私に気づかせてくれた。

「幸せとは何か。」それは、「毎日やって来るこの日常を、過ごすことが出来ている」ということだ。

「また、同じ夢を見ていた」

著 住野 よる

双葉社

多様性のこの時代で

交野市立第二中学校 三年 塚野 栞

私が「52ヘルツのクジラたち」という本を選んだきっかけは、二〇二二年の本屋大賞を受賞し、読んでみたいと思ったからだ。

この本の題名にもある「52ヘルツのクジラ」とは、他の鯨が聞きとれない高い周波数で鳴く、世界でたった二頭しかないクジラのことである。他の鯨が聞き取れないため、たくさん仲間がいるはずなのに何も届かない、何も届けられない、世界で一番孤独な生き物なのだ。

この本は、自分の人生を家族に搾取され、孤独な人生を送ってきた貴瑚という女性と、母親に虐待され「ムシ」と呼ばれていた一人の少年が孤独ゆえ愛を欲し、裏切られてきた彼らが出会う。そして新たな魂の物語が紡がれていくという話である。

私の印象に残った場面は、「第二の人生は、キナコは魂の番と出会うよ。愛を注ぎ注がれるような、たったひとりの魂の番のようなひとときと出会える。キナコは、しあわせになれる」という貴瑚を救った二人の男性、アンさんのセリフのところだ。なぜなら、最初は全く意味が分か

らなかったが読んでいくにつれそれは、アンさんの経験をもとにした言葉なのだろうと思った。この本を読んでいくのちに分かることだが、アンさんには辛い悩みがあり、貴瑚にも悩みがある。互いに打ち明けなかったとしてもそばにただで心が救われていく。そのことを貴瑚に教え、幸せにさせようとしているのを見るとすごく深く考えさせられたため、印象に残った。

その一方、アンさんのセリフで私は心にひっかかったものがある。それは、「しあわせになれる」というところだ。私は、みんながみんな「しあわせ」の基準が一緒だとは思わない。家族といれば幸せという人もいれば、お金さえあれば幸せだという人もいる。みなそれぞれの考えがあり、価値観がある。それはとても素敵なことだ。だがしかし、人間は家族や友達、周りに頼れる存在がいるのに幸せになれないときがある。これはあのときの貴瑚と同じ状態だ。さらにDVやトランスジェンダーに悩み、死を選ぶ者がいる。このようなことは、多様性の現代社会の中であつていいことなのだろうか。52ヘルツのクジラのように誰も声を聞いてくれず、一人孤独に死んでいく。しかしこれを解決することだってできる。悩みを抱えた同士で語

り合い、そこで絆が生まれる。そして一つの命が救われる。悩みに揺れ動かされ、辛い思いをする人の気持ちには、変化しやすいためとても儚く脆いものだ。そのことを胸に刻みながら生きていきたいと思った。

私はこの本を読んで、どんな人であれ、人にはそれぞれの価値観があるんだと思い、その人たちのためにできることがないか、考えたいと思った。例えば、アメリカでは認められている同性愛だが日本では認められていないため、同性愛者の方と共に声を上げたいと思った。私は、今困っている人がいて助けを求めているのなら、誰になんと言われようともその人が救われるのなら何度でも手を貸す、そんな人が世の中にもっと増えたら、多様性を認め、幸せな人が増える。そうすれば、よりよい社会をつくりあげることができるだろう。

「52ヘルツのクジラたち」

著 町田 そのこ
中央公論新社

「ぼくはイエローでホワイトで、 ちよっとブルー」を読んで

交野市立第二中学校 三年 中留 綾那

私がこの本を読んだきっかけは、あらすじの「世界の縮図のような日常」というフレーズに惹かれたからだ。普段私が世界の問題や課題について知ろうとすることはあまりなく、だからこそこの本を通して少しでも興味を持つことができたらと思った。

この本は英国に住む著者の「母ちゃん」とその息子の「ぼく」が身の回りで起こる事件に激突し、悩み考えながらも親子共に成長していくノンフィクション物語だ。私がこの本で、特に印象に残った事件がある。

それは、「ぼく」が中学校に入学した直後に起こった出来事だ。ある日、「ぼく」は同級生のダニエルという少年と喧嘩して帰ってくる。ダニエルはいわゆる「レイシスト」で黒人の少女に差別的発言をしたことで、「ぼく」と衝突したのだ。私はダニエルの発言に対してなんとひどい言葉だと憤りを覚えた。しかし、この時の著者の「無知なんだよ。誰かがそう言ってるのを聞いて大人はそういうこと

をいうんだと思って真似しているだけ。」という言葉で確かにと納得した。私の周りには「差別はだめだ」という考えを持ち、それを私に伝えてくれる大人達がいる。だから、私は差別的な発言に嫌悪感を持つし、そういった発言をしないように心がける。しかし、周りに差別的な発言をする大人がいる環境で育ったとしたらどうだろうか。それを正しいことだと思ひ込み成長する子供もいるのではないだろうか。もしかしたら、その大人も同じような環境で育ったのかもしれない。こういったことが連鎖していることもあって、差別とかいうものは中々無くならないのではないかと思った。

この本で私は多様性やジェンダー、アイデンティティなどたくさんを知り学ぶことができた。けれど、それらのことをすべて理解したわけではもちろんない。やはりまだわからないことはたくさんあったし、価値観の違いなどで納得できないこともあった。なので、この本で学んだことをもう一度自分で調べてみようと思った。そしてもっと視野を広げ今よりもっと理解を深めてからもう一度この本を読んでみようと思う。そうしたら、今と違った目線から考えることができ、また新しい発見があるか

もしれないからだ。「世界の縮図」とはあったが、もちろんこの本に世界のすべてが詰まっているわけではない。世界にはもっと多くの社会についての問題や思想がある。それらをすべて理解することは難しいだろうが、これから色々と学んでいく中で私自身も「自分の考え」というものを持つことができたかなと思った。

「ぼくはイエローでホワイトで、ちよっとブルー」

著 ブレイディみかこ

新潮社



イギリスの13歳に教わったこと

阪南市立飯の峯中学校 三年 平井 康士朗

僕がはじめてこの本のタイトルを見た時、イエロー、ホワイトという色がなんのことかわからなかった。読み進めていくうちに、それは人種のことだということに気づいた。この本に出てくる中学生の少年は日本人の母親と、アイルランド人の父親をもつ「ハーフ」の子どもである。イエロー、ホワイト、ハーフ、ニーハオ、この本には僕がいつも使っている言葉が少し違う意味で使われていたりする。この少年が暮らすイギリスは様々な多様性を持った人が生活している。その中で生きるということがどういうことなのか、主人公の少年を通して教えられた気がした。

よく、人種差別はいけないとか、性差別はいけないという話を聞くことがある。僕はこの本を読む前は、自分自身日本の日常生活のなかで差別を意識して生活することがほとんどなかった。自分は差別をしていないと思っていた。また自分も差別を受けたことがないと思っていた。しかし、この話を母にした時母からの答えは意外なものだった。人は、自分では差別している、差別されている、と感じていなくても無意識にそうなっている場合もあるの

ではないか、というのだ。実際に、僕が知らないだけで、この日本にも差別はたくさんあるのだろう。差別を意識したことがないのは、差別とはどういうものかときちゃんと理解していないからなのではないか、と母に言われた。

本を読み進めていくと、主人公の少年が住んでいる地域や通っている中学校が、あまりにも僕の住んでいる地域とかけ離れていることに驚いた。こんな世界もあるのか、自分だったらこんな中学校に通うのはちょっと恐ろしいなと感じた。現在イギリスではとても移民が増えていて、ありとあらゆる国から来た様々な人種の人と同じ学校で生活している。そして、当然のように差別があったり、いじめがあったりする。しかも、差別は人種に対してだけでなく、家が裕福か貧しいか、出身の地区はどこか、父親がいるかないか、など様々な要因に対してうまれているのだ。そして、これは学校の中だけでなく、イギリスという国全体で、街の中で普通にあることなのだそう。

こんな環境の中で育つと、この少年はいやになってしまいうのではないだろうかと思った。母親が「ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー」と書き込まれたノートを発

見した時、僕は少し胸が痛くなった。ブルーとは気持ちいがふさぎこんでいるという意味を表すことばである。幸い少年はふさぎこんだままにはならず、友達もできて良かったと思った。

多様な生活の中で、彼は差別がどのように起き、何が原因でいじめに発展していくかをいつも目のあたりにしてきたのだろう。そして、それを解決するためにどうしたらよいかをいつも自然と考えて行動していたのだと思った。この姿を見て、彼はいつも冷静に行動できるのはすごいと思った。

ある時彼は、母親に「どうしてこんなにややこしいんだろう」という質問を投げかけた。すると母親が「多様性というのは物事をややこしくするし、喧嘩や衝突が絶えない。だからないほうが楽かもしれない。しかし、楽ばかりしていると無知になる」と答えた。多様性というのは無知を減らす、という点でいいことなんだと思うと言ったのである。

僕はこの言葉を読んでほっとした。これは本を読む前に僕が思っていたことと同じだと思った。自分のまわりには同じような人ばかりがいるから差別はない、と思いつけていた。多様性がないから差別がないと決めつけていたということは無知だったのではないだろうか。

少年は、言っではよくない言葉があることを知っているし、言葉を言う時の言い方なども気をつけないといけないことも知っている。学校にはその日のご飯も食べるのに苦労するような子や、破れた制服を着ている子もいる。貧しい子を助けてあげる時も、言葉を慎重に選ばなければいけないこともある。多様な生活の中で自然とそれを学んでいったのだ。

少年が学校の授業でエンパシーという言葉について学ぶ場面がある。これは「自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって、誰かの感情や経験を分かちあう能力」のことだそう。この少年はまさに自らの体験を通してエンパシーを学んでいるのだなと思った。僕もこの本を読む前は無知だったかもしれないが、無知のままではではなく、学ぶことが大切なのだと教わった気がした。

「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」

著 ブレイディみかこ

新潮社

講 評

審査委員長 古川 知子
(神戸親和女子大学)

今年度「第41回人権啓発詩・読書感想文」に、大阪府内から1,040点の応募がありました。内訳は、詩部門711点、読書感想文部門329点です。

多くの皆さんが応募してくださったことに感謝しますとともに、30人の方の入選をお祝い申し上げます。

審査では、詩と読書感想文の部門ごとに、小学校(小学部)低学年・高学年、中学校(中学部)に分けて、「人権啓発に資するものとなっているか」の観点つまり「広く子どもたちに読んでほしいメッセージであること」を重視し、一人ひとりの子どもたちの心情や背景に想いを馳せながら意見交換を行いました。

詩部門 小学校(小学部)低学年では、「正直に自分の気持ちを表現しているので、読んだ人も率直に受けとめることができる。」「周りの人に、具体的にどのような行動をとってほしいかまでを表現できている。」、小学校(小学部)高学年では、「ストレートな表現で、テンポがよい。」「心の葛藤が表

現されているので、読んだ人が考えさせられる。」等の意見がありました。また、中学校(中学部)では、「〇〇はダメという作品が多い中で、素敵な存在が集まって社会ができあがる」という表現に魅かれた。」等の意見に各委員が共感しました。

読書感想文 小学校(小学部)低学年では、「本のストーリーを自分に引き寄せ、自分ごととして捉えることができていいる。」「いじめの傍観は良くないと、大切な視点が書かれている。」、小学校(小学部)高学年では、「優しい気持ちになれば戦争はなくなる」と、できることを肯定的に表現できている。」等の意見がありました。また、中学校(中学部)では、「本を読んで実は自分も差別をしていたかもしれない」と等と気づいたことが表現されていた。」といった意見交換をしました。

保護者の方々をはじめ、大阪府内の各学校の教職員の方々が子どもたちに働きかけてくださった結果、たくさん素晴らしい作品の応募につながり、ありがたく思っています。この作品集が大阪府内の各学校等において活用され、子どもたちの人権感覚の醸成に寄与できれば幸いです。